

『御注孝経』の伝来と受容

——九世紀日本における唐風化の一事例として——

坂 田 充

はじめに

昔、壁の中より求めいでたりけん書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上のことは知らざりけりな。水くきの岡の葛原、かへすがへすも書き置く跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなりけり。

鎌倉時代に書かれた日記紀行文、『十六夜日記』の冒頭である。

著者の阿仏尼は、夫藤原為家の死後、実子の為相に譲られた所領を異腹の長子為氏に押領されたと幕府に訴えるため、京から鎌倉へと下っていった。「昔、壁の中より求めいでたりけん書」というのは、儒教の経書の一つで、孔子が弟子の曾子に孝道を説くという内容の『孝経』を指す。亡夫の譲り状に我が子の相続が明記されているにもかかわらず、これを押領している為氏は「親不孝」だとする非難が暗に語られているわけである。ここで注目したいのは、直接書名を述べるまでもなく、孔子旧宅の壁中に蔵されて秦の始皇帝の焚書

を免れたという古文経書の発見伝説だけでそれと判るほど、当時の日本で『孝経』が知られていた事実である。日本の歴史上、支配イデオロギーとしての機能まで含め、孝という徳目が浸透するうえで『孝経』が担った（担わされた）役割は、きわめて大きい。

この書が初めて日本へ伝来した時期は不明だが、推古天皇十二年（六〇四）に聖徳太子が制定したとされる憲法十七条にその影響が認められているほか、確実なところでは律令の学制で『論語』とともに大学寮本科（明経科）の必修書とされていることなどから、七世紀中には伝わっていたことが確実である。『孝経』のテキストにはいくつか種類があるが、日本では当初から孔安国が注を加えた『古文孝経』が最も読まれたらしく、⁽³⁾『十六夜日記』の書き出しもそれにまつわる伝説に基づいている。ところが、九世紀に突如として別の『孝経』が受容され、以後、とりわけ朝廷儀礼の場で重きを置かれるようになった。それが、本稿で主題とする『御注孝経』である。

近年の日本古代史研究における律令制・律令国家の理解の仕方として注目されるのは、大宝律令の制定から天平時代にかけての八世紀前半にその最盛期を見るのではなく、それまで固有法的な秩序に制約されて限定的な役割しか果たしていなかったのが、平安京に遷都する頃から礼などの領域で唐制の継受が本格的に進み、九世紀に格式や儀式書の編纂というかたちで整備されていく過程を通して、国制としての役割・機能がよりいっそう拡大・深化したと考えられるようになったことである。⁽⁴⁾ こうした研究動向に照らしてみた場合、『古文孝経』の伝来・受容が律令制成立過程の最初期における唐文化摂取の一事象であったのに対して、『御注孝経』の場合は、律令制の本格的な展開段階における新たな唐文化受容の流れの一環であったと位置づけることができる。本稿でポイントとなるのは、貞観二年（八六〇）に『御注孝経』の採用が打ち出された制を分析することによって、日本に伝来したテキストの種類が特定できる点にあり、さらにそれが受容された時代的背景やその後の影響と関連させて考えることによって、当該期における唐風化の特質にも迫ることができるように思われる。まずは貞観二年に出された制をその述作の典拠にまで遡って検討し、次にそれを手掛かりとして、九世紀の唐風化や対外関係をめぐる諸相へと考察を展開させたい（主要事項の年代は末尾の年表にまとめてある）。

一 貞観二年制の解釈

貞観二年十月十六日に發布された制の全文を、『日本三代実録』によって掲げる。

制、(a) 哲王之訓、以孝為基、夫子之言、窮性尽理。既知、一卷孝経十八篇章、六籍之根源、百王之模範也。(b) 然此間、学令、孔鄭二註為教授正業。厥其学徒相沿、盛行於世者、安国之注、劉炫之義也。(c) 今案、大唐玄宗開元十年、撰御注孝経、作新疏三卷。以為世伝鄭注、比其所注餘経、義理專非。又稽之鄭志、康成不注孝経。安国之本、梁乱而亡。今之所伝、出自劉炫。事義紛會、誦習尤艱。靡厭衆止、更招疑義。故玄宗廣約儒流、深廻睿想、為之訓注、冀闡微言。即勅学士儒官、僉議可否。於是、當時有識、碩德名儒、咸集廟堂、恭尋聖義、妙理甚深、常情難測。同共嗟伏、服請頒伝。侍中安陽県男源乾曜等奏曰、「天文昭爛、洞合幽微。望即施行、佇光来葉」。制曰、「可」。然則孔鄭之注並廢於時、御注之経独行於世。(d) 而唯伝彼注、未説件経。仮之通論、未為允槌、鄭孔二注、即謂非真。御注一本、理当遵行。宜自今以後、立於学官、教授此経、以充試業。庶革前儒必固之失、遵先王至要之源。但、去聖久遠、学不厭博。若猶敦孔注、有心講誦、兼聽試用、莫令失望。まず、「制」の意味であるが、表現・文体から判断するに、実際の文書様式は詔勅であり、それを唐風に表現したものであろう。⁽⁵⁾ 以下、本稿で制ないしは貞観二年制と言え、これを指す。この制の内容は、大きく四つの段に分けることができる。

冒頭の(a)では、孝という徳目とそれについての孔子の言葉の重要性を指摘したうえで、『孝経』が「六籍の根源」（儒教の経書の根本）かつ「百王の模範」であると位置づけられており、『孝経』と

いう書物の重要性を打ち出すことで全体の導入になっている。ここには「一卷孝経十八篇章」とあって、十八という章数により、鄭玄注や玄宗御注など今文系に属するテキストを指していることが明らかであり、『御注孝経』を採用するという全体の内容と対応している『孝経』の書誌については後述。

次の(b)では、『孝経』についての日本の現状が述べられている。「学令に、孔・鄭二註、正業を教へ授くと為す」とあるのは、「学令の規定では、正業を教授する際の『孝経』のテキストとして、孔安国伝(孔伝・鄭玄注(鄭注))の二本を用いることとされている」という意味である。これは、日本の養老令で言う学令6教授正業条の規定を指しているが、その条文は唐の開元七年令(七一九)とほぼ同文であるから、唐令の規定をほぼそのまま継受したものと考えられる。⁸⁾一般的に考えて、唐永徽令(六五二)の学令の規定が日本の大宝令(七〇二)の学令に継承されたとみて誤りなからう。その点では日唐共通の話題と言えるが、制の続きに「安国之注」(孔伝)と「劉炫之義」(孝経述義)とが多く読まれているとあることによって、(b)の段は、唐のことではなく、日本の事情についての記述であることが明白となる。ここで、『孝経』のテキストについて必要な範囲で整理しておこう。

『孝経』には、大きく分けて『古文孝経』と『今文孝経』の二種類があった。両者の区別は、もと経文の字体の違いによるが、実際の内容に大差はなく、章の立て方(古文二十二章、今文十八章)および順序に異同があって、古文に闕門の一章が多いことが主な相違点である。⁹⁾古文と今文という視点で見ると、日本では、天平二年

(七三〇)の美努岡万墓誌に孔伝に基づく表現が見られるのを初めてとして、古文(孔伝)のほうが流布していたことを東野治之氏が明らかにしている。¹⁰⁾このことは、制の(b)で「盛んに世に行はる」として挙げられている孔伝と『孝経述義』が、ともに古文の注釈書であることと符合している。一方の唐では、御注撰定の三年前に、「自頃已来独宗鄭氏、孔氏遺旨今則無聞」とか、「王・孔所注、伝習者稀」¹¹⁾などと言われていることで明らかのように、古文の孔伝などはほとんど読まれておらず、今文の鄭注が圧倒的に流布していた。したがって、貞観二年制の(b)の表現には、『古文孝経』が一般的であった日本の状況が反映されている。

話はやや逸れるが、(b)にはもう一つ重要な点がある。孔伝・鄭注を『孝経』の公式テキストとする令の規定は日唐で共通すると述べたが、唐では開元二十五年令(七三七)でその条文が改定されている。すでに仁井田陞氏が指摘しているとおり、開元二十六年(七三八)に成立した『大唐六典』の注文に「諸教授正業、(中略)孝経・老子、並開元御注。旧令、孝経、孔安国・鄭玄注」¹²⁾とあって、これは「旧令」(開元七年令以前)で「孔安国・鄭玄注」とされていた規定が、開元二十五年令で「開元御注」に差し替えられたことを示している。¹³⁾それにもかかわらず、制の(b)で学令に孔伝・鄭注の規定があるとされていることは、一世紀以上も経った貞観二年(八六〇)に至るまで、日本では、開元二十五年令が検討されていなかったということを意味する。このことは、日本には開元二十五年令が舶載されなかったとする坂上康俊氏の説を傍証するものと言える。ただし、ここでわざわざ学令が引かれていることや、(c)の最後に、

唐では『御注孝経』の頒行と同時に孔伝・鄭注が廃止されたと記されていることからすれば、開元二十五年令が完全なたちで日本に伝来することはなかったとしても、唐令の規定に変更があったこと自体はこの頃に知られるようになっていたのかもしれない。

(c)の部分に移ろう。ここでは、前段の日本の現状から一転して、唐における新しい動向が紹介されている。最初に、玄宗の開元十年(七二二)に『御注孝経』が撰定され、あわせて『新疏三卷』が作られた事実を述べ、以下で御注が編纂されてから唯一正当の位置づけを与えられるまでの経緯を記している。

まず玄宗が御注を撰定するに至った理由として、鄭注(古文)・孔伝(古文)それぞれに対する疑義が持ち上がった事実が挙げられている。すなわち、鄭注に関しては、「世間で鄭注とされているものは、鄭玄が注を加えた他の経書と比較すると見解が矛盾しているし、『鄭志』によればそもそも鄭玄(康成は字)は『孝経』に注を加えていない⁽¹⁷⁾」として、鄭玄の真作であることを疑う見方があった。一方の孔伝についても、「孔安国の本は梁末の混乱で亡佚しており、今に伝わっているのは隋の劉炫から出たものだけである⁽¹⁸⁾」として、伝存しているのは孔安国の真作ではなく、隋代の劉炫が偽作したものであるという疑惑が持たれていた。こうして『孝経』の誦習に支障をきたすようになっていたため、玄宗は自ら諸説を斟酌して新たに訓注を作りあげ、学士・儒官による検討を経て頒布されるに至った。これにより、唐では孔伝・鄭注ともに廃止され、御注のみが行われるようになった。以上が、貞観二年制の時点で認識されていた唐の『孝経』事情である。

最後の(d)では、唐における新動向を受けて、日本でも『御注孝経』を採用するという制度変更が命じられている。唐では開元十年(七二二)に御注が正当とされたにもかかわらず、日本では孔伝や鄭注を伝えているだけで、貞観二年(八六〇)現在でもいまだに御注は読まれていない。鄭注も孔伝も真作ではないのであるから、日本でも御注のみを採用すべきである。今後、大学においては御注を教授し、これによって『孝経』の「試業」(試験と修得認定)を行うこととする。この部分が貞観二年制の核心である。ただ、『孝経』と言えば孔伝であった長年の実状を突然変更すれば、大学からの出身制度に混乱を招くと考えられたためであろうか、「聖を去ること久遠にして、学は博きを厭はず」という理由で、引き続き孔伝を講誦する者にも「試用」を許すという附則が加えられた。以上、やや煩雑になってしまったが、貞観二年制を一通り解釈した。次に節を改めて、制の述作に中国典籍が利用されていることについて述べよう。

二 貞観二年制の述作と二つの『御注孝経』

1 貞観二年制の述作に見られる中国典籍の影響

貞観二年制は、流麗な修辭をこらした駢儷体で、文意の難解な箇所があり、玄宗皇帝と臣下との対話を載せている点などからしても、中国に出自があることは間違いない。その一つとして、鄭注・孔伝の偽作説を記した(c)の前半部分に、『隋書』経籍志の影響が推測される。⁽²⁰⁾たとえば、鄭玄注については、

【貞観二年制】事情である。

【貞観二年制】

世伝鄭注、比其所_レ注餘_レ經_{〔書〕}、義理專非。

【『隋書』経籍志】

有_二鄭氏注、相伝或云鄭玄、其立義与_二玄所_レ注餘書_一不同。とあり、孔安国伝についても、

【貞観二年制】

安国之本、梁乱而亡。今之所_レ伝、出自_二劉炫_一。

【『隋書』経籍志】

安国之本、亡於梁乱。(中略)儒者諠諠、皆云_二炫自作之_一、非孔旧本。

という具合に、内容・表現の共通性を見出すことができる。そして、九世紀後半に藤原佐世が撰した『日本国見在書目録』孝経家の「孝経一卷〈孔安国注。梁末已逸、今疑_レ非古文〉」という箇所が、『隋書』経籍志の「古文孝経一卷〈孔安国伝。梁末亡逸、今疑_レ非古本〉」という記述をほぼ丸写ししていることによって、当時の日本で『隋書』経籍志の孝経の項が読まれていたことを確認できる。したがって、貞観二年制の文章は、『隋書』経籍志を出典の一つとしているものと思われる。

しかし、それ以上に直接かつ深刻な影響を受けているのが、開元初注本『御注孝経』序である。貞観二年制と特に関係のある部分を中心に掲出しよう。

御注孝経序

左散騎常侍兼麗正殿脩国史柱国武強県開国公臣元行冲奉_レ勅撰

(中略)乃勅_二宰臣_一曰、「朕以、孝経徳教之本也。自昔詮解其

徒寔繁、竟不能_レ覈其宗_一明_二其奥_一。観_二斯蕪漫_一、誠亦病_レ諸。

頃与_二侍臣_一参_二詳厥理_一、為_二之訓注_一、冀_二闡微言_一。宜_二集_二學士儒官_一、僉_二議可_レ否_一。於是、左散騎常侍崇文館學士劉子玄・国子司業李元耀・著作郎弘文館學士胡皓・国子博士弘文館學士司馬貞・左拾遺太子侍読潘元祚・前贊善大夫郭王侍読魏鳳・大学博士郭王侍読郃恒_{〔字〕}・大学博士陳王侍読徐英哲・前千牛長史鄧王侍読郭謙光・国子助教鄧王侍読范行恭及諸學官等、並鴻都碩徳、当代名儒、咸集_二廟堂_一、恭尋_二聖義_一、捧_二对吟咀_一、探_二紬反覆_一、至于再_二至于三_一、動_二色相欽昌言_一称_二美曰_一、「大義堙鬱、垂_二七百年_一。皇上識洞_二玄極_一、情融_二繫表_一。革_二前儒必固之失_一、道_二先王至要之源_一、守_二章疏之常談_一、謂_二窮涯涘_一、覩_二蓬瀛之奧理_一、方諭_二高深_一。伏_二請頒_二傳_一、希_二新耳目_一」。侍中安陽県男源乾曜・中書令河東県男張嘉貞等奏曰、「天文昭煥、洞_二合幽微_一。望_二即施行_一、仰_二光_二來葉_一。其序及疏、並委_二行冲_一修撰」。制曰、「可」。(後略)

貞観二年制と文言が一致する部分に傍線を施しておいたので、両者を対照されたい(厳密な意味で文字に異同があっても、字形または意味が類似する場合には文章が一致しているものと見做した)。

これで明らかのように、序の掲出部分は、固有名詞が列挙されたところを省略しただけで、その大部分が貞観二年制で利用されていることが分かる。ただ、序の掲出部分の最後に見える源乾曜らの奏請とそれに対する玄宗の裁可については貞観二年制でもほぼ忠実に引用されているものの、それ以外の箇所は、序の本来の文脈を無視して貞観二年制の地の文、つまり清和天皇の勅語に体裁を変えられて

いる。そのような違いはあるものの、貞観二年制の文章全般が、開元初注本『御注孝経』序に依拠して述作されたことは確実である。

ところで、掲出した序文が貞観二年制の典拠となっていることについては、夙に太田晶二郎氏の指摘がある。けれども、太田氏の論の主眼は、中国から日本に伝来した漢籍が、朝廷における「施行」という手続によって、初めて公認されるという原則のあったことを示す点にあった。そのため、「施行」の原則が中国から日本に入ってきたことを窺わせる史料として、序と制の關係が補足的に紹介されているに過ぎず、『御注孝経』の受容の問題としてはその後も十分な検討がなされていない。よって、以下ではこの点に焦点を当てて論を展開する。

2 開元初注本『御注孝経』序による述作の意味

前項で『御注孝経』序の影響を指摘するにあたって、わざわざ「開元初注本」という言葉を冠したことには理由がある。なぜなら、『御注孝経』ならびにその序には、内容の異なる二種類のものが存在するからである。この点について簡単に説明しよう。

玄宗が撰定した『御注孝経』には、開元初注本（始注本）と天宝重注本と言われるものの二種類がある。開元初注本というのは、文字どおり、開元十年（七二二）に頒布された最初の『御注孝経』であり、その序は元行冲が撰したものである。もう一方の天宝重注本は、天宝二年（七四三）に初注本を補訂して成ったものである。開元初注本に比して、経文はほとんど改変されておらず、注の文言が多少改変されたものの、内容に大きな変更はない。最も重要な変更

点は序にあり、もと元行冲の序であったものが玄宗御製の序に差し替えられたことである。その後、天宝四載（七四五）に天宝重注本によって『石台孝経』が刻されたため、これが西安の碑林に現存することからも分かるように、『孝経』のテキストは天宝重注本（石台本）で固定するに至った。

貞観二年制に戻ろう。この時の制で採用された『御注孝経』は、はたして開元初注本と天宝重注本のどちらであったのか。この問題については、すでに曾我部静雄氏によって開元初注本であったとする説が出されているが、その根拠は、制の中に「大唐玄宗開元十年撰『御注孝経』」とあって最初の御注編纂について触れられていることと、『日本国見在書目録』によれば御注は一本しか伝来していないということによる推測でしかない。また林秀一氏は、曾我部氏の説に根拠が乏しいことを認めつつも、読書始・御湯殿儀・釈奠などの儀式では開元初注本のほうが用いられていること、天宝重注本の古写本がまったくと言ってよいほど現存しないことなどを挙げて曾我部氏の説を支持しているが、やはり傍証の域を出ない。だが、本稿で指摘したように、貞観二年制は開元初注本に載せる元行冲の序をもとにして述作されており、逆に玄宗の御製序など天宝重注本による影響は認められないことから考えれば、日本で御注が採用されたときのテキストは開元初注本であったと断定してよいであろう。

貞観二年制で採用された『御注孝経』が開元初注本であったとして、次の問題は、何故そのテキストは開元初注本でなければならなかったのか、ということである。中国では、天宝重注本が成立した翌年の天宝三載（七四四）に、天下の家ごとに『孝経』を所蔵させ

て誦習を奨励する詔が出されており、天寶重注本が急速に流布していったことが推測される。さらにその翌年には『石台孝経』に刻まれたことによってテキストが固定したため、開元初注本が実際に通行した期間はわずか二十年ほどでしかなかった。しかも、日本で御注が採用された貞観二年（八六〇）は、唐で天寶重注本が唯一正當の地位を占めてから既に一世紀以上も経っている。にもかかわらず、なぜ日本で御注として採用されたのが、旧版で、なおかつ通行期間の極めて短い珍本とも言うべき開元初注本であったのか。

ここで再び曾我部氏の指摘に戻れば、『日本国見在書目録』に御注が一本しか見えないことは、九世紀までの日本には開元初注本しか伝来していなかった可能性を示唆している。もっとも、同目録の性質として、日本に伝来した典籍の全てが網羅されているとは限らないし、御注について初注本と重注本とが区別されていなかっただけということもありうる。しかし、ここまでの分析の通り、貞観二年の時点で開元初注本の影響しか認められないことからすれば、やはり初注本しか伝来していなかったと考えるのが妥当であろう。そうすると、御注の受容は同時に伝来の問題でもあることになり、なぜ日本に伝来した『御注孝経』は開元初注本だったのかを考える必要が出てくる。このことについては、節を改めて述べることにしよう。

三 『御注孝経』の伝来・受容の経緯

1 『御注孝経』の伝来

最初に問題となるのは、伝来時期である。『御注孝経』が伝来し

た経緯を示す史料は存在しないが、伝来時期の可能性としては、①天平七年（七三五）頃、②天平勝宝六年（七五四）頃、③貞観二年（八六〇）以前、の三つに絞って考えてみたい。

まず①であるが、日本に開元初注本が伝来した理由は、それが唐で通行していた時期に舶載されたためと考えれば単純明快であり、天平五年（七三三）に発遣された遣唐使が持ち帰ったとしてみる。

確かに、帰国した吉備真備が天平七年（七三五）に「唐礼一百卅卷」⁽³²⁾はかを朝廷に献上した記録があり、それ以外にも多数の漢籍が将来されたと見られる。⁽³³⁾しかし、その中に『孝経』が含まれていた徴証はなく、唐における御注の採用や鄭注・孔伝の廃止といった動向への対応もまったく認められないなど、このときに御注が将来されたとするには疑問が多い。何よりも、貞観二年（八六〇）の採用までに伝来から百一十五年も経っていたことになってしまい、その理由は説明困難である。

次に②を説明しよう。日本で天平勝宝九歳（天平宝字元年、七五七）に天下の家ごとに『孝経』の所蔵を命じた勅が出されており、これは唐で天寶三載（七四四）に出された勅を模倣したものに他ならない。⁽³⁴⁾だから、日本で所蔵が命じられたテキストも唐に同じく御注のはずであり、その間の天平勝宝四年（七五二）に発遣された遣唐使によって『御注孝経』は日本にもたらされた、と考えるわけである。⁽³⁵⁾しかし、これも①と同様で、この時期に御注の採用やそれともなう制度変更が問題になっていないこと、貞観二年制までのブランクが余りに長すぎることなどの疑問が拭えない。

そこで③である。日本における『御注孝経』の初見が貞観二年制

であることからすれば、そのときの御注の採用決定は伝来と一連のものと考えるのがよいように思われる。また、『孝経』のテキストとして孔伝・鄭注を指定している学令6教授正業条について、『令集解』の諸説がいずれも御注の存在に触れていないことを指摘しておきたい。早くに伝来してはいたが施行されていなかったためという可能性もなくはないが、やはり伝来から施行まで長大な時間がかかる理由を説明できない。この点についての参考例として、貞観元年（八五九）に伝来した『長慶宣明曆経』の場合、採用までに二年しかかかっていないことを挙げておく。したがって、『御注孝経』の日本への伝来は、貞観二年（八六〇）からそれほど遡らない時期であると考えるべき。

伝来時期とならんで伝来経路も問題になるが、これについても確証はない。貞観二年から遡って伝来の契機を探してみた場合、承和五年（八三八）に発遣された遣唐使によって舶載された可能性が考えられるが、推測の域を出ない。また、当該時期における対外関係の実状からすれば、遣唐使以外のルートによって舶載された可能性も大いにあり得る。たとえば、前述した『長慶宣明曆経』が渤海使によって「これ大唐の新用経なり」として日本にもたらされたものであることなどから考えて、当時の東アジア世界における唐の文物や情報の移動はかなり複線的であったことが明らかである。³⁹周知のとおり、新羅人を中心とする海商活動が活発化していた時期でもある。

視点を他国に転じてみよう。当時の中国周辺における『御注孝経』の存在は史料上ほとんど確認できないが、ただ一つ、七四三年

に唐の玄宗が新羅に使者を派遣して景德王を冊立した際に『御注孝経』を賜っているのが管見に入った。ここで注目したいのは、新羅への御注の伝来が、唐との外交儀礼の場として行われている点である。

新羅等で転写されたものが日本へ入ってくるケースも否定はできないが、貞観二年制に見られるような受容のあり方からすれば、日本へも唐王朝との外交関係を通して伝来したと考えるのがよいように思う。日唐間の外交方式と伝来時期の問題を考え合わせると、『御注孝経』は承和の遣唐使によって舶載された可能性が高いと言えるのではなからうか。この推測は、後述するように、仁明朝において『孝経』がクロスアップされることにも依っている。だとすれば、承和の遣唐使が積極的に御注を求めた可能性も考慮すべきかもしれない。

さて、『御注孝経』の日本への伝来を貞観二年制に近い時期に想定した場合、一つの問題が残る。それは、唐で天宝重注本が成立してから一世紀が経つのに、なぜ日本に伝来したのは開元初注本であったのか、ということである。そこで想起されるのが、書禁をめぐる議論である。榎本淳一氏は、唐王朝が書籍の海外流出を制限する書禁を実施していたと主張しているが、この見解を援用すれば、日本に開元初注本が伝来した理由は、新版である天宝重注本の舶載が許可されなかったためと説明できる。ただ、書物自体の性格からしても、天宝重注本が家ごとに所蔵を命じられるほど普及が図られていたことからしても、『孝経』は書禁の対象にそぐわない。⁴⁰しかし、それでもやはり、新版の天宝重注本が入手できなかった事実は無視できない。

日本に舶載された御注がどういうルートをとったのかは不明だが、前述した新羅のケースをここでも参考にしたい。景德王に御注が賜与された七四三年（新羅景德王二年、唐天宝二年）は天宝重注本が修撰されたのと同年であるが、景德王の冊立が三月、唐国内での頒行が五月であるから、新羅に与えられた御注は開元初注本と考えてよい。日本への伝来は新羅よりだいぶ遅れたことになるが、後に中国国内では完全に散佚してしまう開元初注本が、天宝重注本の頒布から一世紀が経つ頃になって伝来した点は重要である。つまり新羅と日本という知られる限り二つのケースでいずれも開元初注本が伝来しており、これは八〜九世紀の東アジア周縁諸国に回っていた御注が開元初注本だけであった可能性を示している。このように考えると、仮に唐代には書禁という明確な法規定や制度が存在しなかったとしても、その時の状況次第で、最新の書籍を出し惜しみする政治判断が下されるケースがあったことまでは否定できない。日本に舶載された開元初注本の『御注孝経』は、そのことを物語っているのではなからうか。

2 受容の背景

次に、日本国内における『御注孝経』の受容が、貞観二年（八六〇）という時期に為された理由を考えたい。伝来したから受容したという面もあるだろうが、そもそも日本側が主体的に求めて舶載した可能性もあるし、伝来した御注を採用せずに孔伝を用い続けるという選択肢もあったわけであるから、当時の日本の朝廷にはもっと積極的な動機があったはずである。

最大の理由は、九世紀における唐風化の流れであったと考えられる⁽⁴⁴⁾。具体的に言えば、唐礼の継受による積奠儀礼の整備が挙げられる。積奠は、孔子はか歴代の聖人に酒食・犧牲・幣物を供して祭る儒教の儀礼であり、中国で国家行事となっていたものが、日本にも律令制の導入にもなつて移入された⁽⁴⁵⁾。本稿の問題に引きつると、貞観二年制が出されてから二箇月も経たない頃に、『大唐開元礼』に基づいて新修された積奠式が諸国に頒布されていることが注目される⁽⁴⁶⁾。これは、当時現行の『弘仁式』には大学での積奠の規定があるだけで、国学での式が欠けていたことに対する処置であったが、「所謂大学式、則因循開元礼大学・国子之式、具載積奠祭之儀、明定進退之度」とされているように、それまで『開元礼』に基づく儀式次第は中央の大学についてだけしか作られていなかったのが、諸国を対象とする式にまで展開したことを意味している。要するに、弘仁年間（八一〇〜八二四）から貞観年間（八五九〜八七七）にかけての時期に、唐の『開元礼』に基づいて積奠の儀式が整備されていき、さらにそれが中央だけにとどまらず、地方にまで拡大されたのである。そして、その間の承和年間（八三四〜八四八）頃に、積奠で行われる講論（経書の講学・論義）の対象も七つの経書で順序が固定（七経輪転講読）するようになるが、その筆頭が『孝経』であった。また、八月の積奠翌日に行われる内論義では、必ずしも前日の講論と同じ経書が取りあげられたわけではないが、『孝経』も含まれていたことに変わりはない⁽⁴⁸⁾。積奠の儀式が唐礼に沿って整備される過程にあつては、式次第の中で饋享に次ぐ核心とも言うべき講論や、天皇御前の内論義で用いられるテキストにも、唐との違い

が問題にされるようになるのは自然の成り行きであろう。それが貞観二年制での御注の採用につながったと思われる。

釈奠の整備は、天皇制の唐風化とも連動している。唐礼では、皇帝や皇太子が釈奠を視学する場合や、皇太子みずから孔子を祭る釈奠についてもそれぞれ独立した規定があり、釈奠が王権と密接に関係していたことを示している。日本では、神護景雲元年（七六七）の釈奠で称徳天皇が大学寮に行幸した例があるだけで、天皇の視学はそれ以外に行われていない。だが、弘仁六年（八一五）を初見として、釈奠翌日に天皇の御前で論義が行われるようになっており、この内論義を創出することによって皇帝視学と同様の機能が果たされるようになったと考えられる。また、皇太子の場合については、『儀式』に皇太子が先聖・先師を拝することが見えており、貞観年間頃の釈奠では皇太子の参加が前提されていたことが分かる。実際、仁明天皇の即位にともなって立太子した恒貞親王は、皇太子時代に百官を率いて釈奠を行ったとされており、承和八年（八四一）秋の釈奠で『孝経』が論じられた際にも参列していた可能性がある。以上のように、弘仁貞観年間の釈奠整備は王権の唐風化として行われた側面が強く、『孝経』の問題もそれに関係している。

『孝経』そのもののへ視点を移そう。中国において『孝経』は、孝という徳目を主題とする性質上、若年者向けの教育書として重視されていた。特に『御注孝経』の場合、前掲した開元初注本の序に明らかなように、玄宗の皇太子・諸王六人の侍読たちが撰定作業に重要な役割を果たしており、玄宗の皇子教育と密接に関連して成立したものであった。⁽⁵⁷⁾ 日本では、天長十年（八三三）に皇太子恒貞親王

が始めて『孝経』を読んだ、というのが早い例である。⁽⁵⁸⁾ 読書始の初見と考えられるが、かかる儀礼が『孝経』によって始まったのは偶然ではなく、やはり唐風化の一環として開始されたと見るべきである。また、ここでも恒貞親王が出てくることに注意したい。このことは、王家の子弟教育で釈奠や『孝経』を重視する中国の慣例が、仁明朝の段階で受容され始めていたことを示しており、清和朝の初年に御注が採用される伏線と言えよう。前に御注の伝来経路として推測した、承和の遣唐使も仁明朝のことである。

貞観二年に『御注孝経』が採用されたのも、清和天皇という幼帝の教育と関連していた。貞観二年制が出された二箇月ほど後の十二月に、天皇は大学博士大春日雄繼から『御注孝経』を教授されている。その記事には、

先是、從五位上行大学博士大春日朝臣雄繼以御注孝経一奉授皇太子。今日有_レ事_二竟宴_一。授_二博士雄繼正五位下_一。御筆書_二告身_一、以寵_レ之。

とある。注目すべきは、「是れより先……今日、竟宴を事むこと有り」という部分である。すなわち、大春日雄繼による御注の教授はこれ以前から行われていたのであり、この日に読したことを受けて竟宴が行われたと読むことができる。では、清和天皇が雄繼に就いて御注を読み始めたのはいつか。初学者が『孝経』を一通り読み終えるのに要する期間を考えた場合、日本の規定ではないが、唐令では『孝経』の修得年限を一年としているのが参考になりそうである。これを念頭に置くと、御注採用の制が出される以前の二月に『孝経』の教授が行われたという記事が注目される。⁽⁶¹⁾ 二月を起点と

すると、十二月の竟宴まで十一箇月余り（閏月を含む）という計算で無理がなく、清和への御注の教授がこのとき開始されたことを示している可能性が高い。この記事には単に『孝経』とあるだけで、御注が否か明示されていないが、教授しているのが同じ大春日雄継であることからすれば、最初から一貫して御注が用いられたものと考えられる。そもそも御注の採用を表明した制の内容は、学令の規定する出身制度の変更であって、もともと法典としての令にも官人登用制度にも拘束されない天皇が、臣下を対象とした制度変更に先立って御注を学んだからといって問題はなかる。むしろ、天皇から受容が始まり、それが制度変更というかたちで下の階層へと広がっていった状況を想定したほうが、この時期の唐風化のあり方としては理解しやすい。したがって、『御注孝経』の採用を正式に表明した制が出されたのは、清和天皇が同書を教授されていた最中のことであり、実質的な御注の受容は、天皇の周辺において、制の発布に先行していたと考えられる。

清和天皇に対する『孝経』の教授は、天皇の読書始として行われたと考えてよい。幼帝の読書として最初に『孝経』が授けられたのは、それが中国流の帝王学の第一歩と考えられたからであろう。制の冒頭で、『孝経』が「百王の模範」と謳われていたことを想起されたい。また、天皇に教授するとなれば、中国で真偽が疑われているテキストを用いるわけにはいかない。このような判断があつて、博士の雄継は御注を教授したものと思われる。御注の採用が詔勅で出され、格として定式化されるに至ったのは、天皇が御注を受容したことから派生した処置であり、天皇制唐風化の波及的な影響とし

て評価できよう。

もう一点だけ付け加えると、日本史上はじめて幼帝が出現したという、清和朝に固有の政治状況が挙げられる。清和天皇が即位した当初から、藤原良房・基経の政權下に幼少の天皇の權威を昂揚させる目的で、徳政的な諸種の政策が打ち出され、唐礼の受容による儀礼の整備や法典の編纂などが立て続けに行われている。⁽⁶³⁾こうした状況に照らして見た場合、清和天皇の勅語として発布された貞観二年制も、儒教イデオロギーによる天皇の權威づけという政治的意図から出されたものであることは明白であろう。『孝経』における孝の言説が、単なる家族・共同体内の倫理に止まらず、君主に対する忠と結びつけることで国家イデオロギーにまで高められたものであることからすれば、この時期に『御注孝経』の採用が打ち出されたことには、天皇を核とする王權の求心力を高めようとする狙いがあったものと推測される。

3 受容の主導者

ここまで、貞観二年制による『御注孝経』採用の背景について、九世紀における天皇制の唐風化という観点から論じてみた。ところで、このような政治判断は、有識者の建言に基づいて為されるのがふつうである。近いところで例を取れば、貞観三年（八六一）に『長慶宣明曆経』が採用された際には、陰陽頭・曆博士であった大春日真野麻呂の奏請がもたれている。真野麻呂は、日本における曆の沿革を説明した後、同書の価値を二年間の試用結果に基づいて奏上し、採用の勅許を得ている。⁽⁶⁴⁾ところが、御注採用の制は、天

皇が一方的に述べた詔勅の形式を採っており、学者など特定個人の建言があったとはされていない。しかし、清和天皇は当時十一歳であり、制に見られる高度に学術的な判断を下す能力があったとは考えられない。『三代実録』に載せる制がもとの文書を省略している可能性もあるが、いずれにしても当時の学識者の中に実際の主導者がいたことは間違いない。私は、大学博士大春日雄継こそがその人であったと思う。唐風化の担い手の問題は唐風文化全体の評価にも関わってくると考えられるから、この人物について少し検討しておきたい。

大春日雄継は、先述したように、貞観二年を通じて清和天皇に『御注孝経』を教授していたと考えられる。御注採用の制はその期間中に出されているので、発布の直接のきっかけが雄継による教授にあったことは確かであろう。さらに付け加えれば、前掲した御注読了の竟宴において、雄継は正五位下を授けられたのみならず、天皇みずから「御筆にて告身（位記）」を書し、以て之を寵したとあって、雄継に対する清和天皇の信頼がいかに厚かったかを窺わせる。また、翌貞観三年に天皇が始めて「論語」を講読した際にも、雄継は侍講をつとめている。時代は下るが、大春日雄継を菅原是善・大江音人らと並べて、清和天皇の五人の侍読に数えている史料もある。以上のように、雄継は清和幼帝の教育に絶大な影響力を持っていた。また、礼の受容の面でも彼の活動が知られる。たとえば、貞観十年（八六八）に文徳天皇陵で火災が発生した際、それに対する「礼制」について諮問を受け、『礼記』に基づき「三日哭」を行うべしと建議している。この時の雄継の意見は公卿達の採るところとはな

らなかったが、当該期の礼の継受において、大春日雄継が一定の役割を果たしていたことを推測させる。つまり雄継は、礼の継受という面も含めて、この時期の唐風化の促進に関与していたと言える。したがって、御注の公式採用は、そうした雄継の立場から発案があり、それに基づいて打ち出されたものと考えられる。貞観二年制の文面も、あるいは雄継によって述作されたものかもしれない。⁽⁶⁸⁾

ところで、大春日朝臣という姓を持つ人々の開明的な性格にも注目される。大春日浄足という人物は、延暦十一年（七九二）以前に入唐して、唐で李自然という女性を娶り、日本に連れ帰っている。⁽⁶⁹⁾全員がその同族というわけではないが、平安初期の大春日朝臣姓には、唐の文化に通じている者が多い。本稿で何度か取り上げている大春日真野麻呂は、曆術を「祖業」として受け継いで五代目になると言われる人物で、天安元年（八五七）に「大唐開成四年・大中年両年曆」を検討することによって大衍曆の誤りを発見し、五紀曆の採用を奏請しているほか、先述した貞観三年の「長慶宣明曆経」採用の奏請には、それが「大唐の新用経」であることが記されており、唐の最新の曆術をいち早く導入しようとしていたことが分かる。これに対して、『御注孝経』採用に功のあった大春日雄継は、もと越前国の春日部氏で、承和十四年（八四七）に春日臣と改めて左京に貫せられ、斉衡三年（八五六）になって大春日朝臣を賜姓されたので、先の兩人とは系譜的につながらない。九世紀はウチ組織の解体期であるし、もともと同族と言えるような関係でもないのではあるが、大学博士に登用されていた雄継に対して大春日朝臣が賜姓されたのは、唐風化の一翼を担ったその学識が意識されていることであ

った、と推測するのは穿ちすぎであらうか。⁽⁷⁴⁾

以上、御注採用の立役者は大春日雄継であったことを論じた。従来あまり注目されていない人物であるが、彼が当該期の唐風化を支えた一人であったことを強調しておきたい。

結語にかえて——貞観二年制發布の帰結——

胆沢城跡から出土した漆紙文書に、『古文孝経』孔安国伝の写本の断簡がある。これについて平川南氏は、概略、次のように説明している。文書の書体から見て書写年代は八世紀半ばより後半、遺構の關係および文書と共伴した陶器・土器の年代により廃棄年代は九世紀中葉前後と推測される。そして、訓点などの書き込みや書き損じが認められないため、個人の学習用や習書の類ではなく、鎮守府において積奠などの公的な儀式に使用されていた写本であったと考えられる。よって、この孔伝は貞観二年制が出されたのを受けて廃棄されたものであり、新たに『御注孝経』を採用してこれに換えた可能性が高い⁽⁷⁵⁾。たいへん魅力的な説だが、疑問もある。貞観二年制は、唐で孔伝・鄭注が廃止されたことに触れてはいるものの、日本では引き続き孔伝の誦習を認める旨を明記しており、孔伝を廃棄することまで命じているわけではない。実際、菅原道真の『菅家文草』に「仲春積奠、聴講『古文孝経』、同賦以孝事君則忠⁽⁷⁶⁾」と題する七言絶句があり、これを寛平五年（八九三）のこととする⁽⁷⁶⁾、制の發布からわずか三十年ほど後に中央の大学の積奠で『古文孝経』が使用されたことが知られる。こういったことからすれば、御注の採用によって孔伝が完全に放棄されたわけではないことは明らか

である。とは言え、御注が急速に普及していったことも確かであるから、平川氏の説を一概に否定することはできず、貞観二年制の影響があった可能性は十分考えられる。

よりはっきりと貞観二年制發布の影響を窺うことができる例としては、すでに林秀一氏によって指摘されている、読書始と御湯殿儀（読書儀）が重要である。いずれの儀式でも平安時代を通じて『孝経』が選ばれることが多く、その場合には御注がほとんどであった。特に読書始についての儀式書の記述を見ると、実際に使用される漢籍には七経・史書・群書治要⁽⁷⁷⁾など十指に余る選択肢があったにもかかわらず、『西宮記』および『江家次第』では『御注孝経』を読む式次第が記されている⁽⁷⁸⁾。これらの記述は、現に『御注孝経』が多用されていた実態を反映している一方で、それを参照する者に対して御注を選択させる方向にも作用したと考えられる。その起源は言うまでもなく、清和天皇の読書始と貞観二年制にある。

読書始の儀式でもう一つ見逃せないのは、『西宮記』『江家次第』ともに「御注孝経序」という五文字を読み上げることが記されている点である。この「御注孝経序」の文言は、開元初注本の冒頭と一致しており、天宝重注本（石台本）で単に「孝経序」とされているのと相違する。したがって、平安時代に読まれていた「御注孝経」のテキストは、一貫して清和天皇が読んだのと同じ開元初注本であったことが分かる。新しい例で言えば、十四世紀末に後小松天皇の読書始に際して開元初注本が献上されたことが知られる。林氏の書誌学的な研究によれば、その後はどなくして開元初注本に玄宗序が竄入するかたちで天宝重注本の影響が現れ始め、徐々にテキスト全

体が天宝重注本に移行していったという。氏の指摘で興味深いのは、天宝重注本がすでに主流となっていた江戸時代の『御注孝経』の中に、玄宗の序を載せる歴とした天宝重注本でありながら、なおかつ巻頭に元行沖の序も併せ持つ特異な本が存在するという。⁽⁸⁰⁾ そのようなことが起きた原因は、開元初注本の序で読書始を行うという長年の慣例があったからと考えるほかない。平安時代の儀式書の影響もあるかもしれないが、その起源を遡れば、元行沖の序によって述べられた貞観二年制に行き着く。⁽⁸¹⁾

以上、平安時代から御注が重んじられたことを確認してきたが、それは天皇を頂点とする宮廷社会を中心に突出した現象であって、冒頭で紹介した『十六夜日記』にも反映しているのとおり、一般には先に受容された孔伝が引き続き膾炙していた。また、鎌倉時代以降になると、孔伝を家本とする清原家などの明経道が台頭し、朝廷儀式の場においてさえ孔伝の用いられる機会が増えたらしい。⁽⁸²⁾ しかし、それでもなお開元初注本の『御注孝経』は読み継がれ、現在までそのテキストが伝わっている。その起点は、まぎれもなく貞観二年制の発布にある。中国で八世紀半ば以降一貫して天宝重注本（石台本）が読まれていたのと比較すれば、九世紀に旧版を舶載して以来、後生大事に開元初注本を伝え続けた日本の歴史は、ある意味、滑稽でさえある。だが、これこそが貞観二年制の帰結であり、九世紀日本における唐風化の特質を表しているとも言えよう。それは一面で、国風文化の土台を築き、それ以降へと継承される日本の古典文化を九世紀の王権が強力に主導したものととして、積極的に評価することができる。⁽⁸³⁾ その一方で、王権を中心とした唐文化・唐物に対する信

仰とも言うべき教条主義的な性格の一面があり、そこに天皇制が影を落としていると見ることも誤りではないように思われる。ただ、九世紀の唐風化が残した影響は、王権の「唐好み」による一過性の流行と断じるだけでは済まないほどの拡がりを持っていることが明らかであり、もっと長いタイムスパンでその後の歴史に及ぼした間接的な影響まで視野に入れて、より多角的に解明される必要がある。

そこで最後に本稿を閉じるにあたって、貞観二年制の発布が後世に残した間接的な影響の一端を指摘しておくことにしたい。それは、結果として、世界中でも日本だけに開元初注本という文化遺産を保存する役割をもたらしたことである。考証学的な観点に立つて見た場合、中国では早い段階で一つの経文・注釈に正当性が付与されたことで、それ以外の多くのテキストが失われてしまったのであるから、文化的に後進であった日本の側だけに開元初注本が残り、優に千年を超える時を経て貴重な資料を伝えることとなったのは興味深い皮肉である。⁽⁸⁵⁾ 東アジアにおける世界秩序が、中国を政治的な中心とする冊封・朝貢体制から、欧米列強のリードする条約体制へと組み込まれていったとき、それまでの中国の圧倒的な文化的求心力は解体し、書籍の流れも大きく変動した。日本と中国の関係を言えば、日本の西洋化にともなう価値観の変化も手伝って、日本から中国へと典籍の急激な逆流現象が起こった。このとき清国駐日公使の随員として来日した楊守敬は、日本で開元初注本『御注孝経』はか多数の佚存書に邂逅し、公使黎庶昌の支援のもと、『古逸叢書』に収録して本国への帰郷を果たした。清朝末期の光緒十年（一八八四）、

明治十七年のことである。⁽⁸⁷⁾

註

- (1) 林秀一「孝経の伝来とその影響——写本時代を中心として——」(『孝経字論集』明治書院、一九七六年) 初出は一九五六年) ほか。
 - (2) 養老学令5経周易尚書条・同7礼記左伝各為大經条、考課令71明經条「律令」(日本思想大系、岩波書店、一九七六年) による。以下同様。桃裕之「上代学制の研究(修訂版)」(桃裕之著作集第一巻、思文閣出版、一九九四年) 初刊は一九四七年) 参照。
 - (3) 東野治之「美努岡万墓誌の述作——『古文孝経』と『論語』の利用をめぐって——」(同「日本古代木簡の研究」稿書房、一九八三年) 初出は一九七八年、小島憲之「学令の検討」(同「国風暗黒時代の文学 上序論としての上代文学」稿書房、一九六八年) 二七三頁以下。
 - (4) 大津透「律令法と固有法的秩序・「格式」の成立と撰開期の法」(水林彪ほか編『新体系日本史2 法社会史』山川出版社、二〇〇一年)。
 - (5) 『日本三代実録』貞観二年十月十六日条。掲出史料は基本的に新訂増補国史大系本による。一部、返り点を改めたり、開元初注本『御注孝経』序などによって校訂を加えたりしたところがあるが、一々明示しなかった。また、(a) (d) の段落番号や傍線は、筆者が便宜的に加えたものである。
- 解釈に関わる校訂について一点だけ述べておく、(c) の前半で従来『三代実録』に従って「世伝鄭注、比其所注餘、義理專非」とされていた部分がある。このままでは文意が通じがたく、新訂増補国史大系本は頭注で「餘」の字を「録」の誤りかとしている。しかし、『狩野文庫本類聚三代格』(吉川弘文館、一九八九年) 卷六所収太政官符では「餘」の下に「経」の字があり、また、『隋書』卷三十二・経籍志の「孝経」の解説に「其立義与玄所注餘書不同」(その立義、玄の注する所の餘書と同じからず) とあることからすれば、「餘」の文字は正しく、その後に「経」または「書」

が脱落していると考えられる。その場合、問題の箇所は「其の注する所の餘経に比ぶるに、義理もはら非なり」と読むことができ、本文で示した解釈のように意味が通じる。

- (6) 早川庄八「制について」(同「日本古代の文書と典籍」吉川弘文館、一九九七年) 初出は一九七八年)。
- (7) 養老学令6教授正業条「凡教授正業、(中略) 孝経孔安国・鄭玄注。(下略)」。
- (8) 『唐令拾遺』学令・復旧第四条。本条文の日唐間の違いは、日本令で『老子』の規定が削除されている点である。
- (9) 『孝経』の諸本については、林秀一「孝経」(中国古典新書、明徳出版社、一九七九年)、および宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題 漢籍篇』(一九六〇年) の孝経類の項を参照。
- (10) 東野治之「美努岡万墓誌の述作」(前掲)。
- (11) 『隋書』卷三十二・経籍志に「古文孝経一卷(孔安国伝(中略))」／古文孝経述義五卷(劉炫撰)」とある。両書とも『日本国見在書目録』孝経家に見えており、日本への伝来が確認できる。
- (12) 『唐会要』卷七十七・貢举下・論経義、開元七年三月六日詔・同五月五日詔。
- (13) 『大唐六典』卷二十一・国子祭酒司業条。
- (14) 仁井田陞『唐令拾遺』(東京大学出版会、一九九三年) 二七三頁。
- (15) 坂上康俊「舶載唐開元令考——『和名類聚抄』所引唐令の年代比定を手懸りに——」(『日本歴史』五七八、一九九六年)。
- (16) 『日本国見在書目録』孝経家に「孝経一卷(唐玄宗皇帝注)／孝経疏三卷(元行冲撰)」と見え、両書とも日本への伝来が確認できる。
- (17) 『鄭志』は、『後漢書』卷三十五・鄭玄伝に「門人相与撰玄答諸弟子問五經、依論語作鄭志八篇」とあるが、散逸して伝わらない。ただし、鄭玄伝で鄭玄が注を加えたとして書名の中には、「孝経」も挙げられている。なお、『鄭志』を根拠にした鄭注偽作説は、開元七年四月

七日の論争における劉子玄の発言に見える『唐会要』卷七十七・貢奉下・論経義。

(18) 『隋書』卷三十一・經籍志の『孝経』の解説も同内容の説を載せる。

(19) 孔伝と鄭注をめぐる論争については、『唐会要』卷七十七・貢奉下・論経義に詳しい。ただし、その後成立した『御注孝経』では、注文に孔伝を参照した部分もあるが、经文に鄭注と同じ今文が採用されており、最終的には古文のテキストが否定されたことになる。

(20) 興膳宏・川合康三『隋書経籍志詳攷』(汲古書院、一九九五年) 一六一頁以下を参照。

(21) 提出史料は国立国会図書館蔵『御注孝経』(請求番号二〇二／八八) によるが、一部に京都大学附属図書館蔵清家文庫本『御注孝経』(請求番号一六六／コ／一四貴) で改めたり補ったりした文字がある。国会本の書誌を簡単に説明すると、享祿四年(一五三二)に三条西実隆が書写した本を、寛政十二年(一八〇〇)に屋代弘賢が模刻したものである。同じ模刻本は、ほかに宮内庁書陵部にも所蔵されているらしく、『図書寮典籍解題 漢籍篇』(前掲) 三八四頁に詳細な解説があつて有益である。

一方の京大本は、清原家旧蔵で鎌倉時代後期の書写と推測されている古写本であり、古いテキストを残している貴重(重要文化財指定)であるが、残念ながら序の前方は半分が完全に欠落しており、残存部分にも文字の欠損が見られる。なお、この本については、京都大学附属図書館のウェブサイト(URL: <http://ddb.libnet.kyoto-u.ac.jp/minds.html>) で写真画像が公開されており、本稿ではこれによつた。

(22) 太田晶二郎『漢籍の「施行」』(太田晶二郎著作集 第一冊) 吉川弘文館、一九九一年。初出は一九四九年。東野治之「施行」された書物」『図書』五〇二、一九九一年も参照。

(23) 『唐会要』卷三十六・修撰(開元十年六月二日、上注孝経、頒于天下及国学)。『旧唐書』卷八・玄宗本紀、開元十年六月辛丑条もほぼ同様。

(24) 開元初注本『御注孝経』序(本文掲出部分参照)、『旧唐書』卷百一・『新唐書』卷二百の元行冲伝には、玄宗の命で『御注孝経』の「疏義」を撰定したことが記されているが、序のことは見えない。

(25) 『唐会要』卷三十六・修撰「至天宝二年五月二十二日、上重注、亦頒于天下」。

(26) 林秀一「今文孝経の経文成立に就いて——鄭注本より御注本への移動を中心として——」(林前掲書。初出は一九七四年)。

(27) 開元初注本と天宝重注本の注文の違いのうち、主なものは『図書寮典籍解題 漢籍篇』(前掲) 三九頁にまとめられている。

(28) 『金石萃編』卷八十七所収の『石台孝経』によると、石台の完成時に拓本上下二巻を献上した上表文には「天宝四載九月一日銀青光祿大夫国子祭酒上柱国臣李齐古上表」とある。

(29) 以上、開元初注本・天宝重注本についての知識は、『図書寮典籍解題 漢籍篇』(前掲)・林秀一「御注孝経序に関する疑惑」(林前掲書。初出は一九三八年)・古勝隆一「孝経」玄宗注の成立」『東方学報』七二、二〇〇四年などを参照した。

(30) 曾我部静雄「奈良朝孝謙天皇時代の詔勅二つ」(同「律令を中心とした日中関係史」) 吉川弘文館、一九六八年。初出は一九五三年。

(31) 林秀一「孝経の伝来とその影響」(前掲)。同「文章博士御進講の御注孝経に就いて」『御説書始の御儀に就いて』(林前掲書。ともに初出は一九四九年)も参照。

(32) 『唐大詔令集』卷七十四・九宮貴神・親祭九宮壇大赦天下勅(天宝三年十二月二十五日)「自今已後、令天下家藏孝経一本、精勤誦習、郷党之中、倍增教授」。『旧唐書』卷九・玄宗本紀・天宝三載十二月甲午条、および『唐会要』卷三十五・経籍・天宝三載十二月勅もほぼ同様。

(33) 『続日本紀』天平七年四月辛亥条。太田晶二郎「吉備真備の漢籍将来」(太田晶二郎著作集 第一冊) 吉川弘文館、一九九一年。初出は一九五九年) 参照。

- (34) 『続日本紀』天平宝字元年四月辛巳条。
- (35) 『唐大詔令集』卷七十四ほか。註32参照。
- (36) 曾我部静雄「奈良朝孝謙天皇時代の詔勅二つ」(前掲)。
- (37) 小島憲之「学令の検討」(前掲)。
- (38) 『日本三代実録』貞観三年六月十六日条。
- (39) 大日方克己「宣明暦と日本・渤海・唐をめぐる諸相」(佐藤信偏「日本と渤海の古代史」山川出版社、二〇〇三年)。
- (40) 『三國史記』卷九・新羅本紀・景德王二年三月条。
- (41) 榎本淳一「国風文化」と中国文化——文化移入における朝貢と貿易——(池田温編『古代を考える 唐と日本』吉川弘文館、一九九二年)。
- (42) 宮崎市定「書禁と禁書」(『宮崎市定全集 第一九卷 東西交渉』岩波書店、一九九二年。初出は一九四〇年)は、書禁が厳しかった宋代においてさえ、経書とその注釈書は書禁の対象から除外するという規定があったことを指摘している。
- (43) 坂上康俊氏は「書禁・禁書と法典の将来」(『九州史学』一二九、二〇〇一年)で、榎本氏の書禁説を批判して、唐は諸外国の求めに対して公開的であったと主張している。
- (44) 弘仁貞観年間、特に貞観年間に唐礼継受のピークにあたっており、天皇制唐風化の画期でもあることは、大津透「天皇制唐風化の画期」(同『古代の天皇制』岩波書店、一九九九年。参照部分の初出は一九九二年)に詳しい。
- (45) 『続日本紀』大宝元年二月丁巳条、養老職員令14大学寮条・学令3積奠条など。
- (46) 『日本三代実録』貞観二年十二月八日条、『類聚三代格』卷十・同日付太政官符。
- (47) 貞観四年の積奠で「御注孝経」が講論の対象となった翌日には、「明経博士等奉参御在所、論義如常」とあって、幼帝の場合でも御前で内論義を行っていることが確認できる(『日本三代実録』貞観四年八月十二

日条。

(48) 積奠についての以上の理解は、彌永貞三「古代の積奠について」(同『日本古代の政治と史料』高科書店、一九八八年。初出は一九七二年)によるところが大きい。

(49) 『大唐開元礼』卷五十一・皇帝皇太子視学、同卷五十三・皇太子積奠於孔宣父。

(50) 『続日本紀』神護景雲元年二月丁亥条。

(51) 『日本後紀』弘仁六年二月戊申条。

(52) 彌永貞三「古代の積奠について」(前掲)。

(53) 『儀式』卷七・積奠講論儀。

(54) 『恒貞親王伝』。

(55) 『続日本後紀』承和八年八月戊申条。

(56) 野田有紀子「学令に見える大学の一側面」(『延喜式研究』一六、一九九九年)では、積奠を中心に、唐の大学が国家の全域を覆う礼秩序の維持機能を果たしていたのに対して、日本では礼秩序に基づく儀礼の導入が大学寮の内部に限定されていたとして、日唐の大学における礼・儀礼の位置づけの違いが明らかにされている。九世紀における礼の受容も唐に比して限定的なものにとどまった面のあることには注意しなければならないが、ここでは王権の正当化を目的として礼の導入が推進されたところに時代の特徴が表れている面を重視した。

(57) 古勝隆一「孝経」玄宗注の成立」(前掲)。

(58) 『続日本後紀』天長十年四月庚辰条。ただし、この時の『孝経』は御注ではなく孔伝であらう。

(59) 『日本三代実録』貞観二年十二月廿日条。

(60) 『唐令拾遺』『唐令拾遺補』学令・復旧第七条。

(61) 『日本三代実録』貞観二年二月十日条。なお、この日の教授の場には、後に『大唐開元礼』を下敷きにして清和天皇の元服式を定めた大枝(大江)音人が同席しており、貞観期の唐風化を支えた両者が場を同じくして

いるのは興味深い。元服式については、中村義雄『元服儀礼の研究——天皇元服について——』（『松学舎大学論集』昭和四十年度、一九六五年）参照。

(62) 『狩野文庫本類聚三代格』巻六に所収された「応_レ以_二御注孝経_一立_二学官事_一」という事書の太政官符は、年号を含む後半部分が失われているものの、細かな文字の異同を除き、『三代実録』に載せる貞観二年制と全くの同文である。これによると、貞観二年制は奉勅官符として出されたことが推測され、後に『貞観格』に収録されたことが判明する。ただ、それ以外に『三代実録』と異なる情報は残存部分には見あたらない。

(63) 笹山晴生『平安初期の政治と文化』（『日本歴史大系（普及版）』第二巻 律令國家の展開 山川出版社、一九九五年）、大隅清陽「九一〇世紀の日本——平安京」第二章『岩波講座日本通史 第五巻』岩波書店、一九九五年。

(64) 『日本三代実録』貞観三年六月十六日条。

(65) 『日本三代実録』貞観三年八月十六日条。

(66) 『平戸記』仁治元年（一二四〇）十一月廿七日条。後藤昭雄氏執筆の『平安時代史事典』「大春日雄繼（おおかすがのおつぐ）」の項を参照した。

(67) 『日本三代実録』貞観十年二月廿五日条。

(68) 大春日雄繼の卒伝は、『日本紀略』貞観十年四月廿三日条に「從四位下行大學博士大春日朝臣雄繼（人名省略）並卒。雄繼年七十九」と残っているだけであるため、経歴の詳細は不明。

(69) 『日本紀略』延暦十一年五月甲子条。

(70) 佐伯有清『新撰姓氏錄の研究 考證篇第二』（吉川弘文館、一九八二年）三頁以下。

(71) 『日本文徳天皇実録』天安元年正月丙辰条。

(72) 『続日本後紀』承和十四年八月丁未条。

(73) 『日本文徳天皇実録』斉衡三年八月丁酉条。

(74) 笹山晴生『唐風文化と国風文化』（『岩波講座日本通史 第五巻』岩波

書店、一九九五年）で、九世紀における在地社会の変動にとまない、嵯峨朝以来の唐風文化を支えた知識人を中心に、伝統的なウチ名から抽象的・中国的な雅号への改賜姓が相次いだと指摘されていることを念頭に置いている。

(75) 平川南「古文孝経写本——胆沢城跡第二十六号文書——」（『同「漆紙文書の研究」』吉川弘文館、一九八九年。初出は一九八四年）。

(76) 川口久雄校注『菅家文章』（『日本古典文学大系』岩波書店、一九六六年）巻五・三六七番、補注一。

(77) 林秀一「御読書始の御儀に就いて」（前掲）。

(78) 『西宮記』臨時七（故実叢書本巻十二）皇太子書始、『江家次第』巻十二・御読書始事。

(79) 註21、寛政十二年屋代弘賢模刻の享祿四年三条西実隆書写本奥書に、「後小松院御読書之始、吾高祖父後押小路内府（公忠）奉_二書進_一之本也」とある。『統史愚抄』至徳二年（一三八五）九月九日条参照。

(80) 林秀一「文章博士御進講の御注孝経に就いて」（前掲）。

(81) 筆者が実見したものとしては、学習院大学図書館所蔵『御註孝経』（文化五年（一八〇八）刊、菅家蔵版。請求番号二四／一一（旧分類））が挙げられる。これは全体として開元初注本を基本としているが、元行冲序の後に天宝重注本の特徴である玄宗序を挿入している。文化元年（一八〇四）の文章博士菅原為徳の後序によると、為徳が所有していた古本は宝永年間（一七〇四〜一七一）の火災で焼失し、その後には求めた二本を石台本や邢昺の『孝経注疏』などで校訂して成ったのがこの本である。天宝重注本で校訂したと言いがくも、玄宗序を載せる以外は基本的に開元初注本のテキストを採用していることから、菅家相伝の『孝経』は開元初注本であったことが窺われる。さらに、後序の中で「清和天皇制曰、（中略）。故吾族謹依明詔、世以御註進講焉」と述べられていることからすれば、菅家が貞観二年制に基づき代々進講を続けてきた御注というの開元初注本であったと考えられる。

(82) 林秀一「孝経の伝来とその影響」(前掲)・「清原宣賢の孝経秘抄に就いて」(林前掲書、初出は一九六〇年)。

(83) 笹山晴生「唐風文化と國風文化」(前掲)のほか、吉田孝「日本の誕生」(岩波新書、一九九七年)・大津透「古代の天皇制」(前掲)を挙げるにとどめる。

(84) 『孝経』について言えば、北宋の雍熙元年(九八四)に日本僧の裔然が太宗に謁見し、中国で散佚していた鄭玄注を献上している(『宋史』巻四百九十一・外国伝・日本国)。ここから推測して、開元初注本もそれより以前に失われていたと考えられる。

(85) 漢籍の佚存書については、王勇「佚書と華刻本」(大庭脩・王勇編『日中文化交流史叢書第九巻 典籍』大修館書店、一九九六年)が体系的に整理されている。同「遣唐使時代のブックロード」(『アジア遊学』三「特集・東アジアの遣唐使」、一九九九年)・「ブックロード」とは何か(王勇・久保木秀夫編『奈良・平安期の日中文化交流——ブックロードの視点から——』農山漁村文化協会、二〇〇一年)も参照。

(86) 「条約体制」という表現は、並木頼寿・井上裕正「世界の歴史19 中華帝国の危機」(中央公論社、一九九七年)の井上氏執筆部分によるものであり、華夷思想に基づく朝貢体制に対して、主権国家間で締結される条約に基づく国際関係のことを指す。後述する楊守敬の来日と訪書活動も、一八七一年に日清修好条規が調印されたことによって、清国の公使館が日本に開設されたという条件のもとで初めて実現したわけであるから、文化・書籍をめぐる日中関係の変容の契機も条約体制の成立という観点から捉えることができる。

(87) 『古逸叢書』に収載された開元初注本『御注孝経』は、本稿でも利用した寛政十二年屋代弘賢模刻本を忠実に覆刻したものである。また、当時の日中両国における漢籍の状況については、楊守敬「日本訪書志」・「隣蘇老人年譜」に記述がある。

【付記】

・本稿の構想は、二〇〇二年度、学習院大学大学院における笹山晴生先生の日本史演習(『日本三代実録』講読)で行った報告をもとにしている。本稿の執筆に際して、榎本淳一氏から関連論文などのご教示をいただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

『孝経』関係年表（8～9世紀）

西暦	唐		日本	
701	《玄宗》 開元 7	孝経論争 開元七年令 御注孝経の成立（開元初注） →鄭注・孔伝の廃止 『大唐開元礼』成立 開元二十五年令 『大唐六典』完成 新羅景德王を冊立し御注孝経を賜う 御注孝経を修訂（天宝重注） 御注孝経を家ごとに所蔵させる 石台孝経の完成	大宝 1	大宝令施行
702			大宝 2	遣唐使発遣
717			養老 1	遣唐使発遣
719			《聖武》	天平 7 入唐留学生吉備真備、唐礼（顕慶礼）などを献上（統紀、4. 辛亥）
722				
732				
735			天平 7	入唐留学生吉備真備、唐礼（顕慶礼）などを献上（統紀、4. 辛亥）
737				
738				
743			《孝謙》	天平勝宝 4 遣唐使発遣 天平宝字 1 家ごとに孝経を所蔵させる（統紀、4. 辛巳） 養老律令施行
744				
745				
752			《光仁》	宝龜 8 遣唐使発遣
757				
777				
804	《文宗》 太和 7 開成 2	九経・孝経・論語・爾雅の石壁作成 石壁完成（開成石経）	《桓武》 延暦 23	遣唐使発遣
833			《仁明》 天長 10	皇太子恒貞、始めて孝経を読む（統後紀、4. 庚辰）
837			承和 5 8	遣唐使発遣 积奠・内論議で孝経を論じる（統後紀、8. 戊申）
838				
841				
860			《清和》 貞観 2	大学博士大春日雄継が天皇に孝経を教授（三実、2. 10） 御注孝経を学官に立て試業に充てる（三実、10. 16） 积奠式を新修し諸国に頒下（三実、12. 8。三代格 10） 大学博士大春日雄継による天皇への御注孝経教授の竟宴（三実、12. 20）
861			3	天皇、始めて論語を講読。大春日雄継、侍講（三実、8. 16）
862			4	积奠にて直講刈田安雄が御注孝経を講じる（三実、8. 11）
879			《陽成》 元慶 3	天皇、始めて御注孝経を読む（三実、4. 26）
884			《光孝》 元慶 8	积奠にて直講直道守永が御注孝経を講じる（三実、2. 6）

註）統紀→『続日本紀』、統後紀→『続日本後紀』、三実→『日本三代実録』